

「家族の多様化」論における性的マイノリティの包摂と周縁化

杉浦郁子（立教大学）

本報告は、「家族の『多様化』を再考する」というシンポジウムの問題設定を受け、「家族の多様化」という枠組みにおいて性的マイノリティの実践を捉えることの限界を整理するとともに、それとは異なる家族社会的アプローチの可能性について検討するものである。

1980年代までの日本の家族社会学は、「シスジェンダーの男女が恋愛感情を共有し、1対1の関係を築いたうえで、そのなかでのみ性交や生殖を行う」という規範を体現した「ヘテロノーマティブな家族」を中心に据えてきた。このことは、性的マイノリティを家族の「外部」にいる者として周縁化することと表裏一体だった。

1990年代の「家族の多様化」論は、この構図に抗する議論として位置づけられる。そこでは、性的マイノリティによる、ヘテロノーマティブな家族とは異なる関係性や実践が、「多様な家族」の一形態として捉えられた。それは、「家族」という概念の再編のみならず、家族社会学そのものの再考をうながす契機となった（木戸 2000）。

また、「家族の多様化」論は、家族の変容を駆動する要因として「個人化」という視点を内包していた（野辺・片岡 2021）。それは、人々が家族関係を「選択できるもの」と認識するようになったことに着目し、その意識の変化を肯定的に捉え直す政治性を帯びた議論だった（久保田 2009）。こうした議論を象徴する概念に「選び取る家族」がある。性的マイノリティは、「与えられた家族」から得られない支えを、同性パートナーや友人ネットワーク、コミュニティのなかで築き、それを「家族」として認識していた（釜野 2008）。「家族の多様化」論がこうした実践に光を当てたことは、性的マイノリティ研究の進展にとっても重要だった。

しかし、「多様化」という枠組みで性的マイノリティの実践を捉えることには、いくつかの問題がある。日本における性的マイノリティの「家族」研究の動向をまとめた三部倫子は、「異性愛家族とは異なるものとしてのセクシュアル・マイノリティの多様性の強調は、前者を不変の実態であるかのように固定化してしまう危険性も孕んでいる」（三部 2016: 77）と指摘する。また、「多様化」論では、近代家族のイメージである「愛情」や「ケア」が、多様な関係性や実践を「家族」として位置づける際の参照枠となっている。性的マイノリティによる実践も、近代家族との類似性において「家族」に組み込まれることになる。ここには、従来の家族モデルへと回収される暴力性、さらには中心的モデルの維持に加担する危険が潜在している。

性的マイノリティの家族を単に研究対象として包摂するだけでは、家族社会学が内包する構造的偏りを問い直すには不十分である。「家族の多様化」論において、性的マイノリティの実践を周縁化するロジックが潜んでいる点を、改めて問う必要がある。加えて「多様化」論には、家族というヘテロノーマティブな装置が生み出す排除や差別の問題を十分に扱いきれていない、という限界がある。こうした課題に家族社会学がいかに対応しうるのか、また、性の多様性の視座から「多様化」論とは異なる道筋を拓いていけるのか。本報告で検討したい。

【文献】

- 釜野さおり 2008 「レズビアン家族とゲイ家族から『従来の家族』を問う可能性を探る」『家族社会学研究』20(1): 16-27
- 木戸功 2000 「家族社会学における『多様性』問題と構築主義」『家族社会学研究』12(1): 43-54
- 久保田裕之 2009 「『家族の多様化』論再考——家族概念の分節化を通じて」『家族社会学研究』21(1): 78-90
- 野辺陽子・片岡佳美 2021 「〈家族の多様化〉と〈子どもの福祉〉は両立するか——特集への招待」『家族社会学研究』33(1): 21-27
- 三部倫子 2016 「日本におけるセクシュアル・マイノリティの『家族』研究の動向——2009年以降の文献と実践家向けの資料を中心に」『家族研究年報』41: 77-93

キーワード：家族の多様化、ヘテロノーマティブティ、性の多様性